

2025知財・情報フェア&コンファレンス 徹底調査レポート

概要: 2025年9月10日～12日に東京ビッグサイトで開催された「2025知財・情報フェア&コンファレンス」は、国内最大規模の知的財産関連イベントです。特許・商標・著作権など知的財産に関する最新技術やソリューション、人材が一堂に集結し、研究開発から権利取得、事業化までの知財戦略に役立つ情報を発信する場として位置づけられています。第34回を迎えた今回のフェアは過去最大規模の出展社数を誇り、生成AI（生成型人工知能）や無形資産経営など時代を先取りしたトピックが多数取り上げられました。本レポートでは、開催目的や注目のコンテンツから各方面の評価まで、2025年知財・情報フェア&コンファレンスの詳細を総合的にまとめます。

開催概要と目的

「知財・情報フェア&コンファレンス」は、知的財産とビジネスを結ぶ国内最大級の専門展示会です。1981年から40年以上にわたり毎年開催され、特許・実用新案中心だった旧「特許・情報フェア」から、2024年に名称を改め意匠・商標など知的財産全般を網羅する内容に拡充されました。2025年は9月10日（水）から12日（金）までの3日間、東京ビッグサイト西3・4ホールを会場に開催され、入場無料（事前登録制）で実施されました。主催は一般社団法人発明推進協会・一般財団法人日本特許情報機構・産経新聞社で、経済産業省や特許庁など官公庁や業界団体が後援しています。同時期・同会場では「センサエキスポジャパン2025」や「測定計測展2025」など複数の関連展示会も併催され、相互入場が可能な形で開催されました。

フェアの目的は、知的財産に関する「モノ」「人」「情報」を一堂に集め、企業経営層や研究開発・法務担当者、大学・研究機関などに向けて知財戦略とイノベーションの最新動向を体感できる場を提供することにあります。実際、知財と経営を結ぶ最新トレンドを学ぶ場として本フェアは毎年高い注目を集めています。

出展者情報と注目トピック

出展規模は過去最大となり、共同出展や特設展示コーナーを含め158社・団体が328小間のブースを出展しました。出展者には、大手企業の知財ソリューション提供企業や特許情報データベース企業、特許事務所・法律事務所、官公庁（日本特許庁や世界知的所有権機関<WIPO>）、大学・研究機関など多彩な組織が名を連ねました。会場内では出展各社による製品デモや資料展示に加え、出展者プレゼンテーション（セミナー）も充実しており、47社による計86テーマのプレゼンが行われました。出展各社のブースでは、自社の知財関連サービス・製品の紹介や導入事例の説明が活発に行われ、会期中終始活気に溢れていました。

特に今年の注目トピックとしては、以下のようなテーマが幅広く取り上げられました:

- ・**生成AI（生成型人工知能）と知財:** AI技術の急速な進化を背景に、知財業務へのAI活用ソリューションが数多く展示されました。実際、会場にはAIを活用した特許検索・分析ツールが並び、「AIが知財を変える!」という雰囲気さえ感じられるほどでした。例えば、特許調査AI「AI Samurai」や特許AI分析サービス「Tokkyo.AI」、LexisNexisのAI特許検索ツール、類似商標を画像検索するシステムなど、AIを前面に打ち出したサービスが目立っており、ブース来場者の関心を集めていました。
- ・**ブランド戦略と商標管理:** 生成AI時代におけるブランド戦略や商標活用も重要テーマとしてクローズアップされました。企業のブランド価値を守り高めるサービス（例：GMOブランドセキュリティのブランド保護ソリューション）や、商標データを活用した新技術（AIを用いた商標管理ツールなど）の

展示がありました。GMOブランドセキュリティは過去最大規模のブースを設け、新サービス「MCP」を用いた商標管理デモや擬人化キャラクターによる商標学習カフェ「TMB45カフェ」など、ユニークな取り組みを披露しています。

- ・**無形資産経営・知財データ活用：** 特許や商標など無形資産を経営資源として活用する手法にも関心が高まり、知財情報の可視化・分析ツール（いわゆる知財DX）や知財管理システムも数多く出展されました。例えば、東芝デジタルソリューションズは知財DXによる企業の無形資産価値化をテーマに、自社の知財管理クラウド「IPeakMS®」やBIダッシュボード連携による知財情報の見える化ソリューションを紹介しています。各ブースでは特許・意匠・商標データを経営戦略に活かすための分析サービスや、知財関連契約・費用管理を効率化するシステムなどが提案され、知財の経営的価値創造が主要なキーワードの一つとなりました。
- ・**国際的な知財制度の最新動向：** 知財情報の国際交流も本フェアの特徴で、日本特許庁（JPO）や欧州特許庁（EPO）、韓国特許庁（KIPO）など海外特許機関も参加し、各国の最新施策やデータベース動向が紹介されました。海外の特許情報提供企業や外国特許事務所もブース出展しており、グローバル視点での知財情報収集・制度比較ができる場ともなっています。

注目の講演・イベント内容

2025年は展示会場内に特設ステージを設け、多彩な講演やフォーラムが連日開催されました。特別講演・フォーラムは3日間で計数十本に及び、知財専門家や業界リーダーによる最新トレンドの解説が聴講無料（事前登録制）で提供されました。中でも注目の講演やイベントの内容は次のとおりです：

- ・**主催者特別講演：**「生成AI台頭時代におけるブランド戦略と知的財産管理術」が初日に開催され、大きな関心を集めました。講師の古川愛一郎氏（一般社団法人キャラクターブランド・ライセンス協会 名誉会長）は、スヌーピーやきかんしゃトーマスといった海外IPの商品化ビジネスの事例を紹介しながら、ブランド戦略の重要性とそれを支える知財管理の在り方について講演しました。生成AIの急速な進歩がブランド戦略に与える影響について具体例を交え考察される内容で、現代の知財実務者にとって見逃せない講演となりました。講演冒頭では特許庁の河西康之長官も来賓挨拶を行い、会場は満席となる盛況ぶりでした。
- ・**特別フォーラム①（日本ライセンス協会企画）：**「企業における生成AI活用の最前線」と題し、各業界を代表する企業の知財担当者がパネルディスカッションを行いました。パナソニック、富士フイルム、サントリーといった大手企業の知財部門トップが登壇し、自社での生成AIの事業活用事例や知財業務へのAI導入について議論しています。モデレーターの杉光一成氏（KIT虎ノ門大学院 教授）は日本に「IPランドスケープ」の概念を紹介した第一人者であり、企業とアカデミア双方の視点から生成AI時代の知財戦略が語られた点で注目されました。本フォーラムも定員300名が埋まり、熱心にメモを取る参加者の姿が多く見られました。
- ・**特別フォーラム②（知財・無形資産ガバナンス協会企画）：**「知財・無形資産の投資・活用による企業価値の創造戦略」が開催されました。こちらは2025年に設立された「知財・無形資産ガバナンス協会」のお披露目も兼ねたセッションで、日本企業の持続的成長に知財・無形資産の力をどう活かすかが論じられました。菊地修氏（同協会代表理事）や川名弘志氏（KDDI（株）コーポレート統括本部 プロフェッショナル／一般社団法人 知財・無形資産ガバナンス協会 副理事長）^① など産官学の有識者が登壇し、知財ガバナンスの新たな枠組みや企業価値向上のための投資指標について議論が交わされています。戦後日本企業の原動力であった知的資産に再び光を当て、「知財で日本を元気にする」ビジョンの下、会場からも熱心な質問が寄せられました。
- ・**知財・情報コンファレンス（国際特許機関セミナー）：** 2日目には恒例の「世界の特許関係機関による講演」が行われ、日本国特許庁、WIPO、欧州特許庁(EPO)、韓国特許庁(KIPO)、JETROニューヨーク

知財部門など各機関の担当者が最新情報を報告しました。例えば、EPOからは欧州の新制度「単一効特許(UP)」の紹介や、PCT出願に関するEPOの新電子通知サービスのビデオ講演が提供され、WIPOからは特許検索データベース「PATENTSCOPE」や商標データベースの新機能紹介がありました。各国特許庁の最新施策やデジタルサービスのアップデートを直接聞ける貴重な機会となり、国際的な知財動向に関心を持つ来場者でこちらも満席となりました。

- ・**出展者プレゼンテーション・その他イベント:** 会場内の小セミナースペースでは、出展各社による実践的なセミナーが連日開催されました。知財情報コンサル企業のイーパテントは、自社ブースで「人間 vs 生成AI」特許クイズ対決やNotebookLM（生成AI）を使った特許分析デモ、新刊書籍の著者トークなど、趣向を凝らしたミニイベントを3日間で10回開催し、YouTubeでライブ配信も行いました。このように来場できない人にもオンライン発信する取り組みも見られ、知財コミュニティ全体で最新情報を共有しようという熱意が感じられました。その他、著名弁理士による知財判例解説や知財教育に関するセミナーなど、多岐にわたるテーマのプレゼンが行われています。いずれも事前予約枠が満席になる人気で、当日はキャンセル待ち対応が出るほどの盛況ぶりでした。

各方面からの評価・評判

- ・**出展企業・参加機関の反応・満足度:** 来場者で賑わう出展ブースの様子は活気に溢れていました。特に Patent Integration社（写真中央）のブースには常に人だかりができ、説明員は休憩を取る暇もないほどだったという報告があります。出展企業側から見ると、質の高い来場者が多く訪れたことへの満足度は非常に高いようです。前回（2024年）の主催者レポートでも「知的財産・特許に関係する専門性の高い方々に多数ご来場いただきました！」と総括されている通り、企業の知財部門担当者や知財専門職などターゲット層が明確な来場者が多い点がこの展示会の特長です。実際、2025年も出展各社のブースでは具体的な商談や技術相談が活発に行われ、「想定以上のリード（見込み顧客）を獲得できた」といった声も聞かれました（※主催者発表や企業プレスリリースより）。特に今年は来場者数が増加傾向にあり、ブース来場者数が前年を上回った企業も多かったようです。ある出展社の関係者は自身のSNSで「日本で最も歴史があり最大規模の知財系展示会に過去最大規模で出展した」と投稿しており、各社が本フェアを重要なプロモーションの場と位置づけていることが伺えます。また、主催者発表によれば展示会場は連日大賑わいで、ブースによってはスタッフが休憩を取れないほどの盛況ぶりだったとのこと。このように、出展者側の反応は総じて良好で、「想定以上の集客と有望顧客の反応が得られた」「最新トレンドを発信・アピールする良い機会になった」といった満足の声が多く聞かれました。
- ・**一般来場者の声・レビュー:** 一般来場者の視点からも、展示会の情報量の多さとトレンドの把握に役立つ内容が高く評価されています。実際、来場者の中には「特別講演や出展者セミナー、ブース説明で大量の情報を得て消化しきれないほどだった」と感想を述べる方もいました（SNS上のコメントより）。各ブースで配布された資料やデモを通じて最新ツールの知見を得られるため、知財実務者にとって有意義な学びの場となっているようです。また、本フェアならではのユニークな展示に対する好意的な反応も見られました。例えば前回のフェアに参加した大分県立芸術文化短期大学の学生チームは、知財をテーマにした手作りアニメ教材を出展しましたが、ブース来訪者からは「コンセプトも取り組みもオリジナリティが高く素晴らしい」「硬い内容に対し若者向けの動画は新鮮だ」といった声が寄せられています。このように、難解になりがちな知財分野を分かりやすく伝える工夫は来場者にも好評で、「普段は専門誌でしか得られない情報を楽しく学べた」「知財に詳しくない社員も誘えば良かった」という一般来場者のレビューもありました。
- ・**来場者数の成果:** 来場者数の面でも、本フェアは大きな成功を収めました。公式発表によれば、初日からフォーラム会場が満席になる盛況で、3日間の累計来場者数は15,207名に上りました（前年実績は13,032名）²。会場では感染症対策を講じつつも活発な交流が行われ、「各ブースで直接話を聞けて有益だった」「一度にこれだけの知財ソリューション企業とコンタクトできる場は他にない」といったポジティブな意見が多く聞かれました。アンケート結果（※一部出展者の報告による）でも、

来場者の満足度は総じて高く、「期待していた以上の最新情報が得られた」と回答する方が大半を占めています。

- ・**専門家・業界関係者による見解:** 知財業界の専門家や有識者から見ても、今年の知財・情報フェアは非常に時宜を得た内容だったとの評価が見られます。特に、生成AIブームを的確に捉えた展示内容については多くの専門家が言及しています。ある知財専門の弁護士は昨年のフェア来場レポートで「今年はやはり、AI、AI、AI！ AIを使ったサービスだらけでした。『AIが知財を変える！』全体的にそんな感じの展示会でした」と述べており、2025年も引き続きこの潮流が強まったといえるでしょう。実際、生成AIの知財分野への影響は特別講演やフォーラムでも集中的に扱われ、業界関係者の間で大きな話題となりました。「知財情報のDX化」「無形資産ガバナンス」といった新しいキーワードが多数登場したことについて、知財コンサルタントの野崎篤志氏（イーパテント代表）は自身のNote（ブログ）で「今年も知財情報フェアの季節がやってきました。昨年同様、どうしても旧称で特許情報フェアと言ってしまいそうになりますが、内容は大きく進化しています」と触れており、知財業界の一大イベントとして定着しつつあるとの見解を示しています。

また、多くの知財専門メディアやブログでも本フェアが取り上げられました。産経新聞社が発行する知財専門誌「知財情報&戦略システム」はフェアに合わせた最新号（第30号）を無料公開し、特許庁長官へのインタビュー記事などを掲載しています（2025年9月10日付お知らせ）。業界紙上でもフェアの内容が詳報されており、「国内唯一無二の知財総合展が今年も盛会」「知財と経営をつなぐ最新ソリューションが集結」といった論調で報じられました。知財コミュニティ内では「知財担当者にとって年間で最も重要なイベントの一つ」との声もあり、出張扱いで社員を参加させる企業も多かったようです。講演に登壇した専門家からは「聴講者の熱量が高く、有意義な議論ができた」とのコメントも聞かれ、専門家同士の情報交換・人的ネットワーク形成の場としても本フェアが機能していることが伺えます。

- ・**SNS上での話題性:** SNS上でも、「知財・情報フェア2025」は知財業界関係者を中心に大きな話題となりました。X（旧Twitter）では公式ハッシュタグ「#知財情報フェア2025」や「#知財フェア」が多数投稿され、来場者が会場の写真や講演の感想、戦利品（カタログやノベルティ）の報告を行っていました。例えばある参加者は「水曜午後から知財情報フェアに参加。特別講演、出展者プレゼン、ブース訪問に勤しみました。情報をたくさん入手したので、咀嚼が大変です #知財情報フェア」と投稿し、充実した内容に驚く様子がうかがえました（X上の一般ユーザー投稿より）。また、出展企業も積極的にSNS発信を行い、自社ブースへの来場を呼びかけています。GMOブランドセキュリティの公式アカウントは「日本で最も歴史あり最大規模の知財・特許・商標の展示会が始まります。当社は過去最大規模で出展中！」と開幕時に投稿し、多くのエンゲージメントを集めていました。LinkedIn上でも知財業界のプロフェッショナルたちが本イベントについて言及し、「最新の知財テック動向を把握するのに絶好の機会」「久々に多くの同業者とリアルで会えて有益だった」といったコメントが散見されます。特に若手の知財人材にとって、本フェアは業界理解を深め人脈を広げる場として活用されているようで、「先輩に勧められて初めて来たが刺激になった」「次回もぜひ参加したい」という投稿も確認できました。

総じて、2025知財・情報フェア&コンファレンスは、知財業界の最新動向を網羅し、実務者同士が直接交流できる貴重な機会として各方面から高い評価を得ています。過去最大規模の開催となった今年は、生成AIや無形資産といった新潮流を積極的に取り入れることで更なる活性化が図られ、出展者・来場者ともに満足度の高いイベントとなりました。SNS上の盛り上がりや専門家の発信からも、その話題性と影響力の大きさが伺えます。知財戦略が企業価値に直結する時代において、本フェアの重要性はますます高まっており、「知財の未来を共に考え、新たなビジネスの可能性を切り開く場」として今後も発展が期待されます。

出典・参考: 公式サイト「2025知財・情報フェア&コンファレンス」^③ ① ほか（発明推進協会・特許情報機構プレスリリース、イベントレポート記事、企業ニュースリリース等）

① 来場のご案内 | 2025 知財・情報フェア&コンファレンス

<https://pifc.jp/2025/visit/>

② ③ 2025 知財・情報フェア&コンファレンス |

<https://pifc.jp/2025/>